

ヒメウラナミジャノメの變異研究 並に其學名に就て

石 宙 明

朝鮮開城松都高等普通學校

本論文は 1934 年鹿兒島高等農林學校開校 25 周年記念論文集 713—716 頁に發表せる本種 194 個とその後採集せる 374 個、併せて 568 個を以て研究せるものである。比較標本として使用せる外地産は別とし、この 568 個は悉く朝鮮産で、その産地は咸北國境地方を始め半島各地及び濟州等である。

本種は LEECH(1892: 抜文後出)や福田卓氏(1912: 動物學雜誌, 24 卷)も既に論ぜる如く、眼紋及び大きさに變異甚しく、其兩極端の個體に接する時は別種の感が起る程である。余は朝鮮産本種翅面の眼紋の數に於ける變異と、前翅長に於ける變異との一端を認めることにする。

先づ眼紋の數に於ける變異から論ずることにする(第 1 表參照)。

第 1 表

前 翅 表 面		後 翅 表 面		前 翅 裏 面		後 翅 裏 面	
前 角 斑	a	第 6 室	d	前 角 斑	j	第 7 室	m
a の直下斑	b	第 5 室	e	j の直下斑	k	第 6 室	n
第 2 室	c	第 4 室	f	第 2 室	l	第 5 室	o
		第 3 室	g			第 4 室	p
		第 2 室	h			第 3 室	q
		第 1 室	i			第 2 室	r
						第 1 室	s

註 1. 表中のローマ字はその指示場所に現れた眼紋の名稱とす。

註 2. 便宜上眼紋各個の大きさ及び其發達の程度は、假に之を度外視し、肉眼的のものは全部取扱つた。

註 3. 一方のみに現れる眼紋即ち左右相稱ならざるものも左右相稱のもの同様に取扱つた。

註 4. 後翅表裏面共第 1 室斑は 2 個の小斑に分離する場合も之を 1 個と見做すことにする。

眼紋の有無によつて供檢個體を分類すれば次の第 2 表の如く 23 型となる。

第 2 表

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	♂	♀	計
1	○	○					○	○	○	○				○	○		○	○	○	1	—	1
2	○		○				○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	—	1	1
3	○			○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	—	3	3
4	○			○	○		○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	—	1	1
5	○				○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	3	10	13
6	○				○	○	○	○	○	○				○	○		○	○	○	—	6	6
7	○				○		○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	1	—	1
8	○				○		○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	1	6	7
9	○				○		○	○	○	○				○	○		○	○	○	5	28	33
10	○				○		○	○		○				○	○		○	○	○	—	6	6
11	○					○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	2	—	2
12	○					○	○	○	○	○				○	○		○	○	○	—	1	1
13	○					○	○	○		○				○	○	○	○	○	○	2	—	2
14	○					○	○	○		○				○	○		○	○	○	—	1	1
15	○					○	○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	1	—	1
16	○					○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	1	—	1
17	○					○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	c	20	2	22
18	○					○	○	○	○	○				○	○		○	○	○	190	38	228
19	○					○	○		○	○	○			○	○		○	○	○	1	—	1
20	○					○	○		○	○				○	○		○	○	○	—	1	1
21	○					○	○		○	○	○			○	○	○	○	○	○	1	—	1
22	○					○	○		○					○	○	○	○	○	○	4	—	4
23	○					○	○		○					○	○		○	○	○	138	22	160
總計																				371	126	497

註 1. ○は眼紋の存在を，數字は各型に屬せる供檢個體數を，—は其缺を示すものとす。

註 2. 各型は眼紋名のアルファベット順に排列す。

第2表によつて次のことが明かとなる。

(1) 前記論文集(715 頁)にも報ぜるが如く，前翅表面 a 斑，後翅表面 g 及び h の 2 斑，前翅裏面 j 斑及び後翅裏面 n, o, q, r, s の 5 斑，合せて 9 斑は決定的の眼紋である。

(2) 福田卓氏(1912: 動雜, 24 卷, 64 頁)は，本種の眼紋の部分及び位置に関する記

事に於て“或室の上面に眼紋のある場合には、其室の下面にもあり。即ち眼紋が同じ室の上下兩室に現るる際には、下面の者を先とし上面の者を後にす。……………尙、此事實は將來更に廣き研究によりて、其當否を確めらるべきも、恐らくは一般の(筆者註—蛇眼蝶科全般)通則の1つとして差支なき者なるべし。”と認めてあるけれど、余の研究では第2表の示す通り第1型のb斑、第6, 12, 14諸型のf斑の如く表面斑であり乍ら裏面斑に先んずるものもあつて、福田氏の説には一致せざる事實がある。但し一般には裏面斑が表面斑に先んずるものである。

(3) 後翅表面第5, 6兩室に現れる眼紋は暖地産程出現頻度が多い傾向を示すやうである。余の研究(上記第2表)せる朝鮮産に比して福田氏の研究(前出論文65-66頁)せる内地産にはこの兩斑が更に多く現れてゐるからである。既に LEECH 氏も Butt. from China, Japan and Corea. pp. 90—91 に “This species is very variable both in size and shape; also as regards the number and definition of ocelli, which on the secondaries range from one in a specimen from Hakodate to five in a specimen from Chang-Yang.” と認めて此事を暗示してゐる。

(4) 從來多くの學者は、本種に於て後翅裏面第4室斑の在るものを *baldus* FABRICIUS, 無いものを *argus* BUTLER として別物に取扱つてゐたけれど、上記第2表に示せる如く、其後翅裏面第4室斑は本種に於ける不安定斑で、此斑の有無によつて別物にするのは當を得てゐないと思ふ。上記第2表によつて見るに、所謂 *baldus* に當る個體は ♂ 33個で ♂ 全體の 9%, ♀ 22個で ♀ 全體の 18%, 合計 55個で全體の 11% となり、福田卓氏の研究(1912: 動雜, 24卷, 68頁)に於てより稍多い結果となつてゐる。要するに *baldus* と *argus* とは同物異名であることが明瞭である。然らば其學名は何れにすべきかといふに、次に其學名の變遷を記し適せる學名を選ぶことにする。

Papilio philomela, JOHANSEN, Amoen. Acad., vi, p. 404 (1764).

Papilio baldus, FABRICIUS, Syst. Ent., App. p. 829 (1775).

Ypthima baldus, HEWITSON, Trans. Ent. Soc. Lond., (3) ii, p. 286 (1864).

Ypthima baldus, PRYER, Rhopalocera Nipponica, p. 30, pl. ix, fig. 3.

Ypthima philomela (Syn. *Y. baldus*), MARSHALL & DE NICÉVILLE, Butt. Ind., i, p. 216 (1882).

Ypthima argus, BUTLER, Proc. Linn. Soc. Lond., Zool., p. 56 (1878).

Ypthima philomela var. *argus*, LEECH, Butt. from China, Japan & Corea, pp. 90—91 (1892).

Ypthima argus, ELWES & EDWARDS, Trans. Ent. Soc. Lond., p. 35 (1893).

Ypthima baldus ab. *argus*, SEITZ, Macrolep. of the World, p. 91 (1906).

Ypthima argus, 松村松年, 日本昆蟲大圖鑑, 504頁 (1931).

Ypthima argus, 内田清之助, 日本昆蟲圖鑑, 881頁 (1932).

Y. baldus baldus, *Y. argus*, 土居寛暢, 原色朝鮮の蝶類, 13頁 (1934)

上記諸論文によれば, 本種の學名には幾度も變遷があり, 最近は *baldus* と *argus* とが別種に取扱はれてある様であるけれども, 前記の通り, 此兩者は種, 亞種, 變種, 型, 異型の何れにして分離しても無意味のもののやうである。第2表でも明瞭であるやうに後翅裏面の眼紋は5個6個のはおろか, 7個のものもあるに於てをやである。而して所謂 *baldus* に當る個體は近來日本内地では報告されてゐないやうに多くの書物に書かれてあるけれど, 前出福田氏の論文 (1912) にも認められ, 余も平壤中學生徒によりて採集された長野縣産で典型的の *baldus* と云はれる程の♂を1個持つてゐる。福田氏の論文中の挿圖 (65頁) では, この問題の後翅裏面第4室斑が幾分他に比して小で誤解される疑も無いではないけれど, 余の所有せる實物標本にはこの斑の著しく發達して他斑同様の個體も少くないことを添記して置く。要するに本種の學名は先に發表された *Ypthima baldus* FABRICIUS とすべく, 随つて *Y. argus* BUTLER はその synonym となるわけである。

上記第2表を以て各型の眼紋の合計を出し, 其數によりて更に分類すれば第3表の如くなる。この第3表は全然不自然的なものではあるけれども, これによつて雌雄間の眼紋の數量上の關係を知ることが出来る。

第 3 表

眼 紋 の 數	♂	♀	計
9	138	22	160
10	195	46	241
11	30	31	61
12	5	13	18
13	3	11	14
14	—	3	3
計 總	371	126	497

この第3表によれば, ♂♀共眼紋は10個を有する個體が最も普通で, ♀は♂に比して稍多い傾向を示してゐる。

次に前翅長の變異表に就て論ずる事にする。第4表は前翅長の變異表で其個體數が前記第2, 3兩表のと異なるのは, (a) 眼紋と前翅長との研究開始に時間的に差異があり, (b) 其研究が材料蒐集の爲め長時間に亘り, 途中他人に分譲したりした爲め, (c) 標

本不完全で眼紋研究には役立たずとも前翅長測定には差支なき個體, 又は其反對の場合の個體が少く無いこと等のためである。

第 4 表

前翅長のmm	16	17	18	19	20	21	22	23	24	計
♂ の 員 數	1	5	48	167	158	31	7	2	—	419
♀ の 員 數	1	9	42	54	31	3	4	4	1	149
總計										568

♂の平均値は19.45 mm, ♀の平均値は19.05 mm

咸鏡北道北部産で最初は別亞種に取扱ふべきではないかと疑つた程である。更に福田氏の研

余の研究では福田氏の研究 (1912: 動雜, 24卷, 134頁) に於けると同様に, ♂は♀に比して, 高緯産度は低緯産度に比して, 翅長は明瞭に大である。變異表中の23-24 mmの大部分は

究と余のとを比較すれば一層明瞭となる。

本種の雌雄間には前記の眼紋にも前翅長にも統計的に差異が認められるのみならず、第二次性特徴としては福田氏（前記論文 134 頁）も認めた通り、雌は雄に比して前角が聊か圓みを帶ぶものである。尙、福田氏（66—67 頁）は本種に於て期節的差異を認めてゐるけれども、余の標本では開城地方では 6 月初旬と 8 月初旬とに、即ち年 2 回發生するやうであるが、書き立てる程の期節的差異は認められない。

Resumo

Pri La Varieco de *Ypthima baldus* FABRICIUS kaj Gia Namo.

De

D. M. SEOK

Mi priskribis la variecojn de ocelli kaj longecoj de flugiloj uzinte 568 individuojn, kaj la nomo *Y. argus* BUTLER fariĝis sinonimo de *Y. baldus* FABRICIUS.

(1935, Apr. 10, Songdo.)
